

**地域基盤型／指向性
保育士養成カリキュラムの
検討と実践に関する研究**



はじめに

滋賀短期大学は、1970(昭和 45)年の開学より 50 年にわたり保育者養成の学科を有し、2020(令和 2)年入学者を含めると、延べ 8,419 名の幼稚園教諭二種免許状と保育士の資格取得を目指す学生の育成を行ってきました。

2017(平成 29)年に文部科学省、厚生労働省の通達により、幼稚園教諭、保育士養成のカリキュラムが全国的に刷新されることとなりました。これまでは、こうしたカリキュラム再編時には、通達に沿って、大学の中だけでカリキュラムを検討し、変更してまいりました。しかし、今回、それだけでは本当の意味での地域に根ざした保育者を養成しているとは言えないのではないか、ということをあらためて問う機会となりました。

2004(平成16)年に文部科学省が法制化した、コミュニティ・スクールは、保護者や地域の方々との学校運営について協働しながら「地域とともにある学校づくり」を進める法律に基づいた仕組みです(図1)。当学においても、この観点を取り入れることが重要だと考えました。

そこで、滋賀県内の施設、保育所・認定こども園の方と共に地域に根ざした保育者を養成するためのカリキュラムを構築し、それに基づいた教育を実践すること、そして、そのカリキュラムの効果を検証していくことを目的とした研究を行いました。

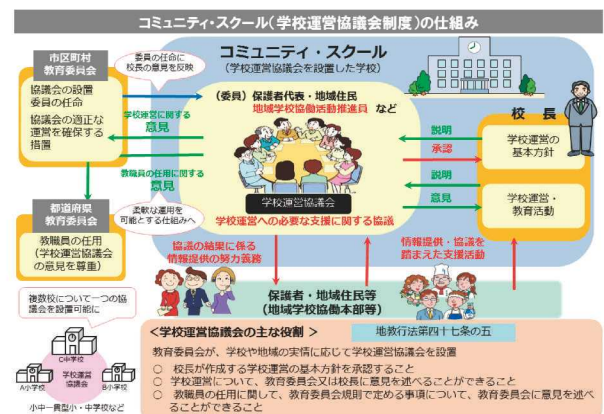
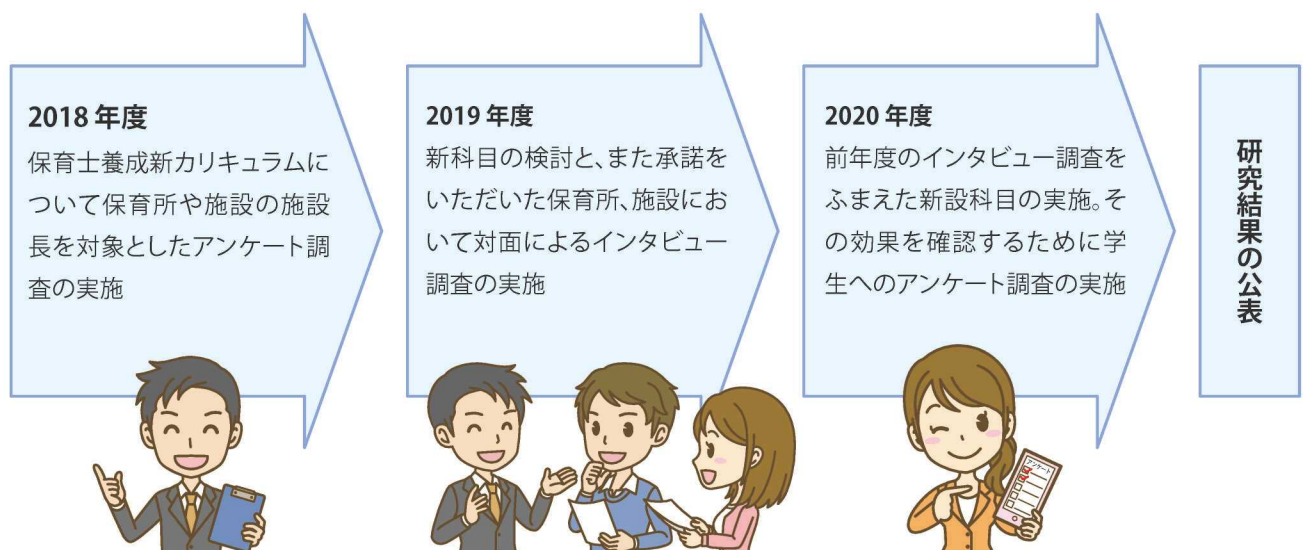


図1 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/
(文部科学省 HP)



保育者の量的確保とあわせて、今後はこれまで以上に質的な保証も必要とされていると考えています。皆様に今回の結果をご拝読いただき、また皆様からご意見等をいただきますようご協力の程よろしくお願いいたします。

研究 1 滋賀県内を中心とした保育所や施設の施設長を対象としたアンケート調査の実施

2019 年度 4 月より始まった保育士養成新カリキュラムに関する質問、保育士養成における音楽、図画工作、体育の必要性に関する質問、保育士として必要な知識や技能に関する質問で質問紙にて行った。

【方法】

• アンケートの内容

- 1) 施設の種類に関する質問
- 2) 施設内の保育士の人数に関する質問
- 3) 2019 年度 4 月より始まる保育士養成新カリキュラムに関する質問
- 4) 保育士養成における音楽、図画工作、体育の必要性に関する質問
- 5) 保育士として必要な知識や技能に関する質問(自由記述)

• 調査対象

滋賀短期大学が実習等でお世話になっている保育所(便宜上、認定こども園を含むものとする)、施設からランダムサンプリング(公立保育所 15 園、私立保育所 15 園、14 施設)保育所 16 箇所(回収率 53%)、施設 10 箇所(回収率 71%)

【結果】

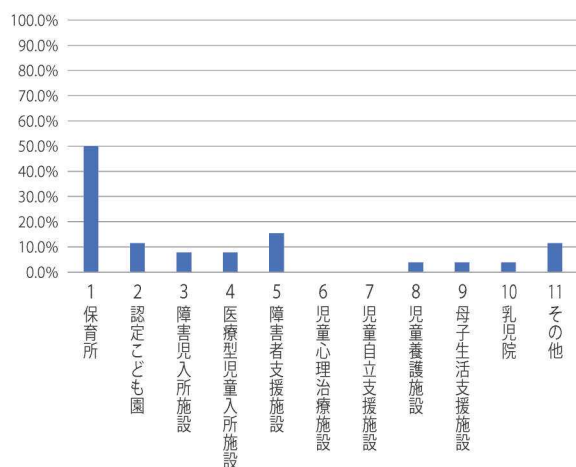


図2 調査依頼施設の種類の複数回答

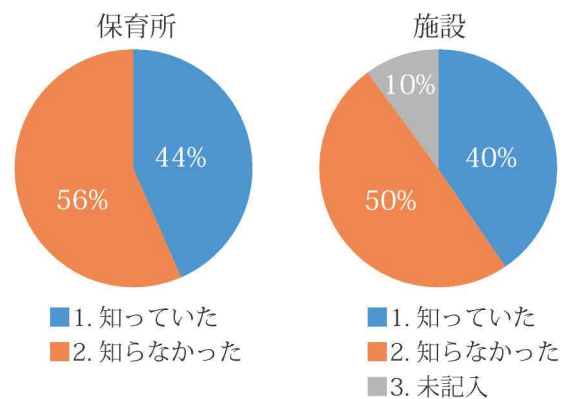


図3 カリキュラムの変更について

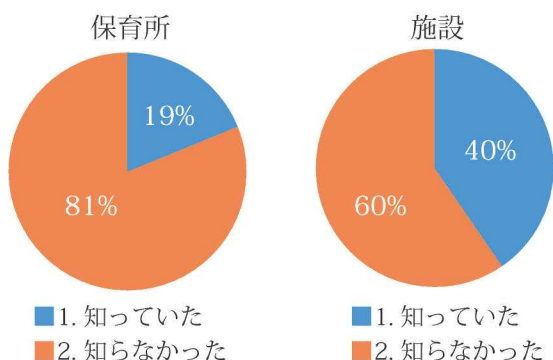


図4 「乳幼児保育」に関する授業時間の増加について

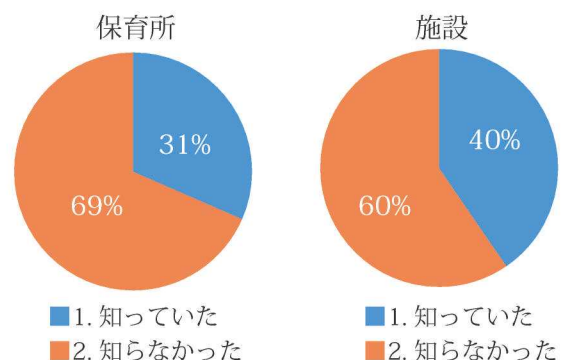


図5 新カリキュラムでは、乳児期、児童期以降にも力を入れるカリキュラムになることについて

表1 音楽・図画工作・体育についての必要性

			頻度	相対度数
音楽	知識	1 絶対必要	7	26.9%
		2 やや必要	18	69.2%
		3 やや不要	1	3.8%
	技能	1 絶対必要	9	34.6%
		2 やや必要	16	61.5%
		3 やや不要	1	3.8%
図画工作	知識	1 絶対必要	8	30.8%
		2 やや必要	16	61.5%
		3 やや不要	2	7.7%
	技能	1 絶対必要	8	30.8%
		2 やや必要	17	65.4%
		3 やや不要	1	3.8%
体育	知識	1 絶対必要	7	26.9%
		2 やや必要	18	69.2%
		3 やや不要	1	3.8%
	技能	1 絶対必要	7	26.9%
		2 やや必要	17	65.4%
		3 やや不要	2	7.7%
計			26	100.0%

自由記述では、保育士として働く場合、特に必要だと思われる知識や技能では、子ども、保護者、他の職員とのコミュニケーション能力に関する記述が 58%みられた。

【考察】

新カリキュラムについて、保育士養成校(以下、養成校)は把握しているが現場までは周知されておらず、施設よりも保育所の方が新カリキュラムについて知らなかったことが明らかになった。そのため、新カリキュラムの他、保育士養成に関する厚生労働省からの通達に関して保育現場に伝えていくことは、養成校の責務であると考え。保育士養成の質を保証し、養成校と現場が協働していく必要があることを考えると、実習等で情報交換を行う機会や最新情報の交換を行うことが必要である。網野他(2017)⁽¹⁾

音楽、図画工作、体育の知識と技能の必要性に関する結果は、保育所では約半分程度は絶対必要、施設では絶対に必要だとは考えておらず、差がみられた。

保育士に必要な知識、技能については、コミュニケーション能力を挙げている保育所、施設がともに 6 割近くあった。保育士養成に求められることは多岐にわたる。そのため、保育士養成に必要な本質を見極めながら、教科に関する科目と同様にカリキュラムの中で検討していく必要がある。

研究2 保育所、施設を対象としたインタビュー調査（2019年度実施）

【目的】

保育所（便宜上、認定こども園を含めるものとする）、施設の施設長が短期大学の2年間に学生が学んでおいて欲しいこと、大切にしておいて欲しいことについて、どのように考えているかを把握するためにインタビュー調査を行う。そして、その内容を新カリキュラムに反映していくことを目的とする。

【方法】

- **対象**… 研究1のアンケート調査用紙において、インタビュー調査協力依頼の項目があった。そこで協力可と回答のあった保育所、施設をインタビュー調査の対象とした。
- **録音**… 訪問時にICレコーダーによる録音の可否を伺った。可であった場合のみ録音し、その音声データを分析対象とした。
- **分析**… 音声データから文字起こしを行い、テキストデータを作成した。テキストデータから「学生の間に大切にしておいて欲しいこと」、「習得しておいて欲しいもの」に該当するキーワードをチェックした。分析はNvivoを用いて行った。



【結果】

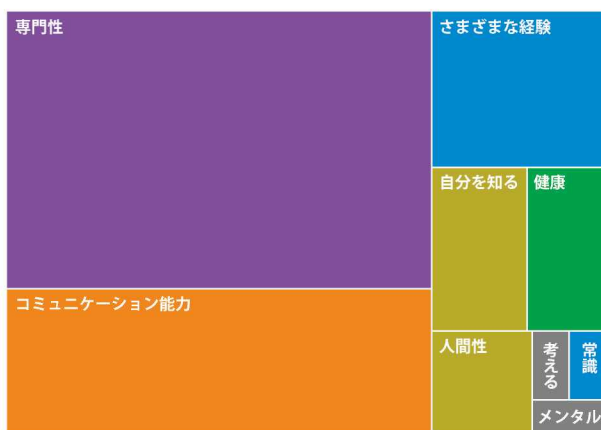


図6 保育所の階層チャート



図7 施設の階層チャート

図6、図7は保育所、施設の階層チャートである。これを見れば、インタビューの中でどのような内容がどのような頻度で語られたかの全体像を把握することができる。保育所、施設ともに第1位は「専門性」であり、第2位以降は保育所、施設では少々異なった。主な内容は次のとおりである。

- **専門性**…保育所では専門性として、「発達理解」、「子どもと一緒に表現できる」、「遊びには意味があることへの理解」、「多様性を受け入れられる」などのキーワードがみられた。施設では、保育所と同じく「発達理解」がみられたほか、「子どもの人権、権利」、「いじめ」、「子どもたちに対する大人の語りかけ方」がみられた。なお、施設では、障害に関するキーワードが多くみられた。本来は専門性の中に含めるべきであるが、障害のことを知ってもらいたいという強いメッセージを感じたため、専門性とは別に項目を作成した。
- **コミュニケーション能力**…保育所では、「相手の思いを汲み取る」、「自分の思いを伝える」といったキーワードがみられた。施設では、「挨拶ができる」、「空気を読む」、「寄り添う」といったキーワードがみられた。
- **さまざまな経験**…保育所では、「インターンシップ」、「ボランティア」、「現場を知る」といった保育現場を学生のうちから経験して学ぶという内容のキーワードのほか、保育現場に限定はしない「自分の好きなことに取り組む」などのキーワードがみられた。施設では、「さまざまな経験」、「映画」、「旅」、「アルバイト」といった現場に限定しないキーワードが目立った。



【考察】

保育者の専門性に関しては、これまでに様々な知見が集積されている。例えば、野田他(2011)^②は、「社会人基礎力」、「保育士としての力」、「社会福祉援助力」の3点を考えている。また、草信他(2009)^③は「知性に裏打ちされた感受性」だとし、山川(2009)^④は専門性向上の柱は振り返りであるとしている。保育者の専門性は多岐に渡り、一つのキーワードでは語れないものと思われる。その中で実践力に含まれるものを養成するためには、演習科目を増やすとともに学生がカリキュラム外でさまざまな経験をするのが重要だと思われる。コミュニケーション能力に関しても大学のカリキュラム内で演習科目を増やすなどの工夫は可能だが、やはりさまざまな経験をするのが不可欠だと思われる。こうしたさまざまな経験ができるように大学としてサポートしていくことが重要だと思われるが、新型コロナウイルスのために、これまでと同じ形式、頻度ではクラブ活動、ボランティア活動等が出来ないのも事実である。今後はカリキュラム改革とともにさまざまな経験を保証するための工夫が必要だと思われる。

研究 3 新設科目の受講生に対してのアンケート調査

これまでの研究成果を踏まえ「子どもとあそび」、「多文化共生の保育と方法」、そしてさらなる深い学びを目指して「アドバンスプログラム(以下アドバンス)」を新設した。アドバンスに所属する学生向けには、「保育リーダー論Ⅰ」を開講している。私たち研究チームは、これら新設科目・プログラムの設置効果や学生の受け止めについて調査を行った。

【方法】

新設科目を受講した学生にアンケートを実施した。質問は Google Forms を使用しウェブ上で回収した。また、学生には授業のなかでこのアンケートは任意回答であることを伝えている。

【結果】

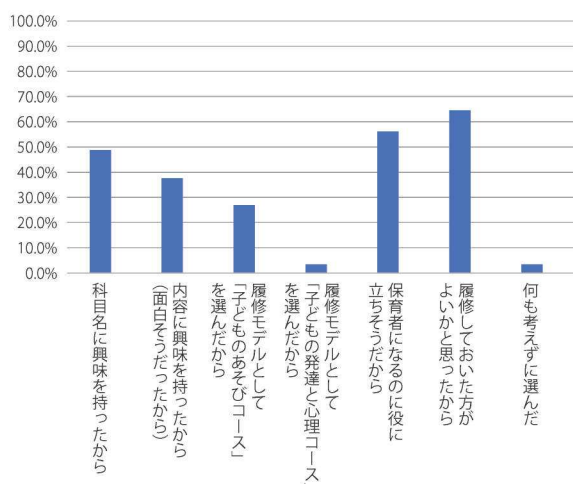


図8 なぜ「子どもとあそび」を履修しましたか n=37 複数回答

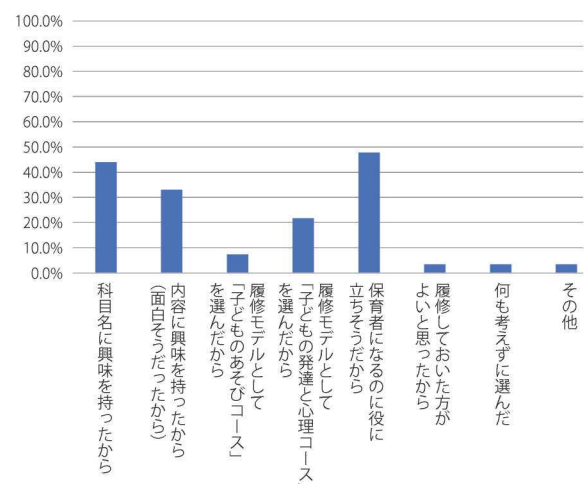


図9 なぜ「多文化共生の保育と方法」を履修しましたか n=27 複数回答

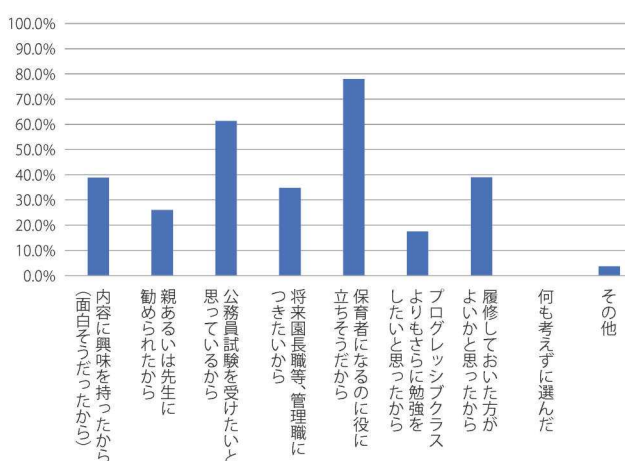


図10 なぜアドバンスクラスに進もうと思いましたか n=23 複数回答

表2 2020年度 新設科目の授業目的

子どもとあそび	<ul style="list-style-type: none"> 子どもを取り巻くあそびについての基礎的知識を身につけ実践的・体験的に理解すること 理解したことを実践できるようになること
多文化共生の保育と方法	<ul style="list-style-type: none"> 多文化共生の保育活動のための保育者をめざし、そのために必要な知識と理解を深めること 理解したことを実践できるようになること
保育リーダー論Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> 保育者としての成長過程のイメージをもち、保育の楽しさ、協働しながらの実践指導力、コミュニケーション力、リーダーシップを学ぶこと 学んだことを自らのキャリア選択に役立てていくこと

上記の新設科目・プログラムは完全な「選択科目」である。なぜ履修・参加したかを問うたところ図8から図10のような結果になった。共通しているのは、「保育者になるのに役に立ちそうだから」という回答が多いことである。

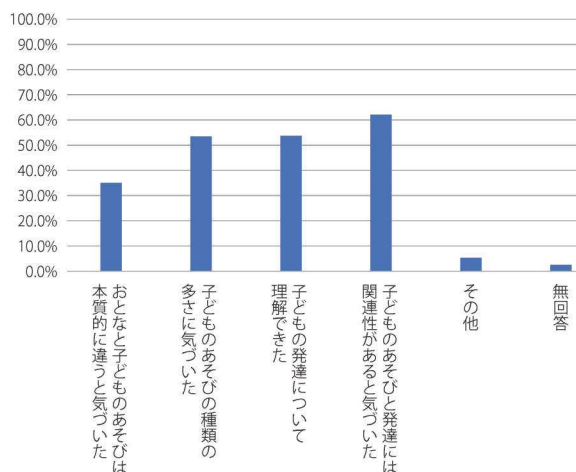


図11 「子どもとあそび」を受講して気づいたこと n=37 複数回答

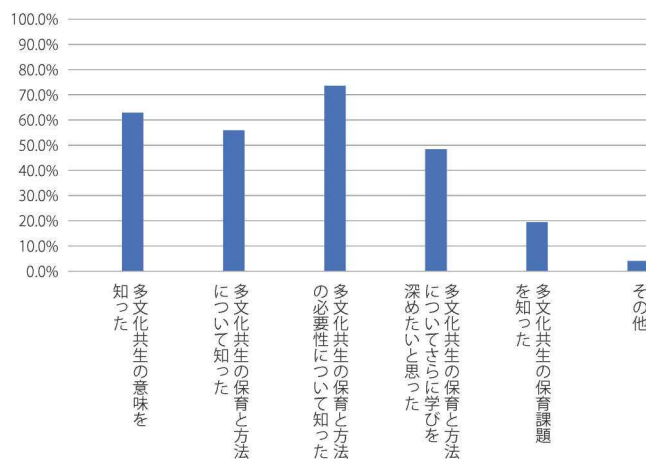


図12 「多文化共生の保育と方法」を受講して気づいたこと n=27 複数回答

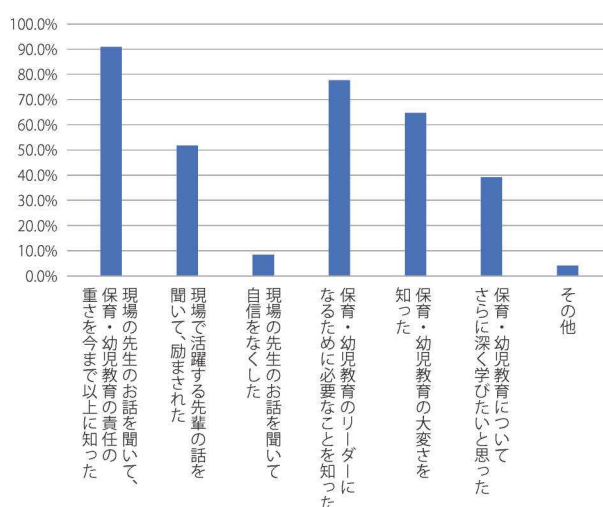


図13 「保育リーダー論Ⅰ」を受講して気づいたこと n=23 複数回答

表3 2022年度 開講予定科目の授業目的

「臨床福祉学」	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの課題から、勤労世代のメンタルヘルスや労働問題など世代を超えた福祉課題への対応法を学ぶ ・子どもの問題だけでなく、勤労世代が直面している問題も学ぶことで、家庭への支援も射程に入れた保育士養成を目指す
保育リーダー論Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・保育リーダー論Ⅰをふまえ、さらに、「対応力・判断力」を「対応力・コミュニケーション力」等の実践指導録を学ぶ ・学んだことを自らのキャリア選択に役立てていくこと

これら選択科目を受講した学生の気づきを表したのが図11から図13のグラフである。様々な学びがあったことがうかがえる。特に「保育リーダー論Ⅰ」においては、「現場の先生のお話を聞いて、保育・幼児教育の責任の重さを今まで以上に知った」が最も多かった。

【考察】

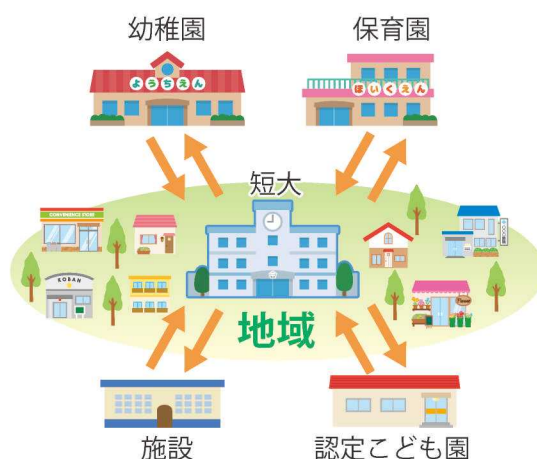
調査からは、これら選択科目受講生は「保育者になるのに役に立ちそうだから」という思いをもって受講していることが分かった。アドバンスに所属する学生は公務員志向が強い傾向にあった。選択科目には現場の先生方からレクチャーいただく機会があるが、そうした講義で「責任の重さを知る」ことにつながっている。

松木(2013)^⑤では、介護福祉士と保育士の養成カリキュラムを比較し、前者が「技術」に傾斜しつつある一方で、保育士養成カリキュラムは「子どものあそび・文化に根差している」ことが指摘されている。保育の技術を軽視するものではない。ただ、「技術」のみを切り離して学んでも現場で生かせるかはまた別の話である。選択科目の「小回りの良さ」を活かして、今後も保育の現代的課題に向き合えるカリキュラム作りを志向していきたい。

おわりに

研究1の調査結果から、保育士養成に関する厚生労働省からの通達に関して保育現場の方に伝えていくことが必要であり、研究2のインタビュー調査では、学生が短大の2年間で学んで欲しいことは「専門性」、「さまざまな経験」、「コミュニケーション能力」、「障害について」、「さまざまな経験」でした。研究3では2年間のご意見をふまえた新設科目を設置し、学生のテーマに関して興味・関心を刺激することができたと考えています。今回の新設科目修了の卒業生への調査なども念頭に、今後さらに養成課程を改善していく所存です。今村他(2010)⁶⁾は、「子育てに関わるすべての人とのネットワーク構築は、子育て支援の重要な要素である人材育成も含めた、地域の子育て支援の大きな推進力として望まれるものである。」と述べています。今後も今回の研究を機に地域の施設、保育所の先生方との対話を大切に、カリキュラムに反映・改善を加えながら、コミュニティ・スクールの大学版として保育者養成に励んでいきたいと考えています。当学が開催している施設実習連絡会議や保育所実習連絡会議だけでなく、この感染症の対策として進んだ遠隔会議システムを利用した情報交換の場も検討に入れ、地域と協働できればと考えています。

なお、この冊子をご拝読いただき、またご意見をいただければと考えております。つきましては、右下 URL または、QRコードを用いて、スマートフォン等よりご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



<https://bit.ly/2NLnewH>



謝辞：最後に、この研究は、滋賀県社会福祉協議会 内藤基金の助成により遂行されたものです。深く御礼申し上げます。

文献

- (1) 網野 武博、阿部 和子、太田 和男 他(2017)「平成28年度指定保育士養成施設における教育の質の確保と向上に関する調査研究」、一般社団法人全国保育士養成協議会、111-123
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/study/report.pdf (2017.3.31公表)(2021.3.22閲覧)
- (2) 野田 敦史、藤田 雅子(2011)「保育士の専門性における構成要因の検討—保育士志向学生の自己評価から—」、東京未来大学研究紀要 4、37-43
- (3) 草信 和世、諏訪 きぬ(2009)「現代における保育者の専門性に関する一考察—子どもと響き合う保育者の身体知を求めて—」、保育学研究 47、186-195
- (4) 山川 ひとみ(2009)「新人保育者の1年目から2年目への専門性向上の検討—幼稚園での半構造化面接から—」、保育学研究 47、31-41
- (5) 松木 宏史(2013)「『子どもの貧困』と保育士養成—保育士のソーシャルワーク機能をめぐって—」滋賀短期大学研究紀要 38、101-113
- (6) 今村 方子、新内 和美、肥塚 陽子(2010)「大学、地域、行政との『協働』による保育士養成の在り方についての考察」子ども未来学研究 5、35-47

「地域基盤型／指向性保育士養成カリキュラムの
検討と実践に関する研究」

著者： 深尾秀一（滋賀短期大学 副学長）
林 幸範（滋賀短期大学）
松木宏史（滋賀短期大学）
浜崎由紀（滋賀短期大学）
松井典子（滋賀短期大学）
荻田純久（元滋賀短期大学 現関西学院大学）

発行 2021 年 3 月

発行元 「地域基盤型／指向性保育士養成カリキュラムの
検討と実践に関する研究」ワーキング
大津市竜が丘24-4
滋賀短期大学、乳幼児総合研究所 内



滋賀短期大学